

パレスチナ赤新月社医療支援事業（レバノン）派遣 2018年4月13日～同27日

国際医療救援部 中出雅治

「パレスチナ」と聞くと、ガザやヨルダン川西岸などをイメージされる方が多いと思いますが、1948年のイスラエル建国以来、エジプト、シリア、ヨルダン、レバノンなどの周辺国にも多くのパレスチナ人が逃れました。彼らのうちで最も劣悪な環境にいるのが、レバノンのパレスチナ難民キャンプの人々です。レバノンにおけるパレスチナ難民は、市民権や財産権といった基本的人権を与えられておらず、従って国籍もありません。加えて厳しい就労制限による高い失業率と貧困があります。

レバノン国内には12のキャンプがあり、国連のパレスチナ難民支援組織であるUNRWAを始めとして、パレスチナ赤新月社、その他さまざまなNGOの支援を受けています。医療に関しては、クリニックレベルはUNRWAが支援しており、病院はパレスチナ赤新月社が運営しています。日赤では、パレスチナ赤新月社との二国間事業で、このパレスチナ赤新月社の運営する病院支援事業を2016年から調査、設計を行い、準備をしてきました。計画全体では、レバノン国内の5つの病院と、ガザ地区の2つの病院支援を予定していますが、このたび（2018年4月）レバノンのベイルートのキャンプ内にあるハイファ病院で支援を開始しました。

事業開始に先立って3月から国際医療救援部の李主事が1年の予定でベイルートに駐在してロジスティクス関係の準備をしています。今回私は、医療関係の準備のために3回目のベイルート入りをしました。

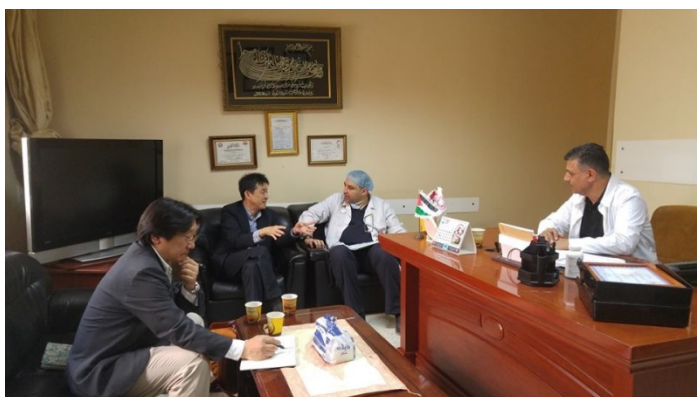


レバノン国内にある5つのパレスチナ病院



ベイルートの難民キャンプ内にあるハイファ病院（パレスチナ赤新月社運営）

た。この事業では、レバノン内の5つの病院と、パレスチナ赤新月社レバノン支部、レバノン赤十字社、国際赤十字赤新月社連盟（IFRC）、赤十字国際委員会（ICRC）のほか、オランダ赤十字、カナダ赤十字など多国の赤十字社で同じく医療関連の支援をしているところなど、数多くの関係機関



ハイファ病院で、病院幹部と打ち合わせ

があり、調整がうまくいかないと事業もうまくいきません。中東特有の問題や、治安についても懸念事項を解決しておかなければなりません。今回の私のレバノン派遣は要員として医療に携わるのではなく、医療チームの1週間前に現地入りして5つの病院を再訪し、ベイルートで各種調整業務を行い、第一陣医療チームを迎え入れるという、2週間の短期ミッションでした。

具体的な病院支援の内容は、まず救急の質の改善です。キャンプ内の病院はパレスチナ人自身で運営されています。つまり医師も看護師も少しの例外を除いてパレスチナ難民です。今いる医師たちは、主に1990年代以前に、東欧や当時のソ連などに留学して医学教育を受けて帰ってきた人たちですが、2000年以降、パレスチナ難民がレバノン国外に出ることが非常に難しくなりました。このためにこの15年～20年の知識や技術のアップデートが不十分で、このギャップを埋めることがまず最初の目標です。救急医1名と看護師2名を1チームとし、医師は3ヶ月、看護師は6か月交替で継続的に派遣し、支援していきます。



ハイファ病院にて、医療チーム第一陣の加藤医師（熊本日赤）と関塚看護師長（名古屋第二日赤）

幸い中東の人々は国を問わず親日的な人が多いです。これは日本人の宗教的、人種的な中立性に加え、中東で武力行使をしなかった国であるのも大きいと思います。従って日赤とパレスチナ赤新月社との関係も良好で、パレスチナ赤新月社にとって日赤は重要なパートナーです。極論すれば、世界から忘れ去られようとしているレバノン

のパレスチナ難民を日赤が支援するというその事実だけでも、パレスチナ赤新月社にとって大きな意味があるにとらえてくれています。

我々もアジアやアフリカでの病院の経験は豊富にあるものの、いわゆる途上国ではない中東地域での病院支援は初めての経験です。

イスラエルの建国以来 70 年にわたって人々が生活するキャンプ。これからの道のりは長く、時間もかかり、困難も多いと予想していますが、病院スタッフレベルでもこの友好関係を築いて、なんとかよい支援ができるよう頑張っていきたいと思います。